

上林遺跡

－農産加工場建設に伴う埋蔵文化財発掘調査報告書－

1998

有限会社 ぶった農産
石川県野々市町教育委員会

上林遺跡

－農産加工場建設に伴う埋蔵文化財発掘調査報告書－

1998

有限会社 ぶった農産
石川県野々市町教育委員会

例　　言

1. 本書は石川県石川郡野々市町上林地内に存在する上林遺跡の報告書である。
2. 本遺跡の調査は有限会社ぶった農産の加工場建設に伴い、同社の委託により野々市町教育委員会が実施したものである。
3. 調査の期間、面積、担当者は次の通りである。
調査期間：平成9年4月9日～平成9年5月17日
調査面積：約450m²
調査担当：徳野裕子、永野勝章（野々市町教育委員会）
4. 本遺跡の発掘調査及び報告書刊行に係る費用の一部は有限会社ぶった農産が負担した。
5. 本書執筆は徳野裕子が担当した。
6. 本遺跡の発掘調査に北野博司（石川県教育委員会主査）、安 英樹（石川県立埋蔵文化財センター）、吉田 淳、横山貴広（野々市町教育委員会）、田村昌宏（野々市町役場農政課）の指導を受けた。記して感謝申し上げる。
なわ、発掘調査では下記の人達の協力を得た。重ねて感謝申し上げる。
《発掘調査》
井手和郎、岩田孝七、小幡頼三、木下 光、瀬川朝子、田端 実、中川吉三、
中川美幸、永田芳子、西川千明、西尾 稔
7. 出土遺物整理作業は増山明美が行った。遺物写真は徳野が撮影し、編集は徳野が行った。
8. 本書の挿図の指示は次の通りである。
 - (1) 方位はすべて磁北を表示してある。
 - (2) 水平基準は標高を示してある。
 - (3) 挿図の縮尺は図内に表示した。
9. 本遺跡の出土遺物、遺構図、遺物実測図、写真は野々市町教育委員会が保存管理している。
10. 土器実測図は断面黒塗りが須恵器、白抜きが弥生土器、土師器、スクリーントーンを貼ったものは赤彩、内面黑色土器を意味する。

目 次

第1章 位置と環境	1
第2章 調査に至る経緯と経過	1
第3章 調査の概要	1
第1節 分布調査	1
第2節 発掘調査	1
遺構全体図	3
第4章 遺構と遺物	5
第1節 遺構	5
第2節 遺物	5
第5章 まとめ	7
観察表	9
写真図版	

第1章 位置と環境

上林遺跡は石川県のほぼ中央に位置する野々市町上林地内に所在する。野々市町は金沢平野のほぼ中央、山海もなく起伏のない平坦地で、東西4.5km、南北6.7km、面積13.56km²という小さい町である。土質は肥沃で豊富な地下水に恵まれているため都市型農業に適しており、昭和40年代までは田園地帯が広がり集落点在するのどかな風景であった。昭和50年以降は北陸地方の中核都市金沢市の隣町という条件もあり、急激な都市化人口増加が進み、現在は4万4千人を有する日本海沿岸の雄町となった。本遺跡の所在する上林は野々市町の南端に位置しその隣りは鶴来町である。本遺跡の南側には主要地方道金沢・小松線（加賀産業道路）が走っており、車の量も多く、田園の比較的多いこの地域でも一昔前の景観とは全く変わったものとなってきている。

野々市町の地形は雷峰白山を源とする石川県最長の河川手取川によって形成された扇状地が大きな特色となる。町の大部分は扇央部にあたるが、その扇央部においても何度も度か洪水にみまわれたといふ。もちろん今では洪水はなくなったが、それ以前の時代にあっては手取川の治水は困難を極めたものと思われる。本遺跡周辺の地形はこの様に大小の洪水と氾濫の繰り返しによって地形が形成された模様である。

第2章 調査に至る経緯

上林遺跡は、農産加工場建設に伴う緊急発掘調査である。

平成8年に有限会社ぶった農産より農産加工場を建設するため埋蔵文化財の有無についての照会があった。農産加工場建設予定地には周知の遺跡があり、予定地の南西側で昭和49年度に石川県教育委員会が発掘調査を行っていることから、野々市町教育委員会はぶった農産に分布調査が必要と回答した。

平成9年に分布調査を実施し、その結果から遺跡が存在すると判断し、ぶった農産に発掘調査必要な旨を通知した。これにより、野々市町教育委員会は事業者である有限会社ぶった農産と再度協議を行い、平成9年4月からの発掘調査の実施が決定した。

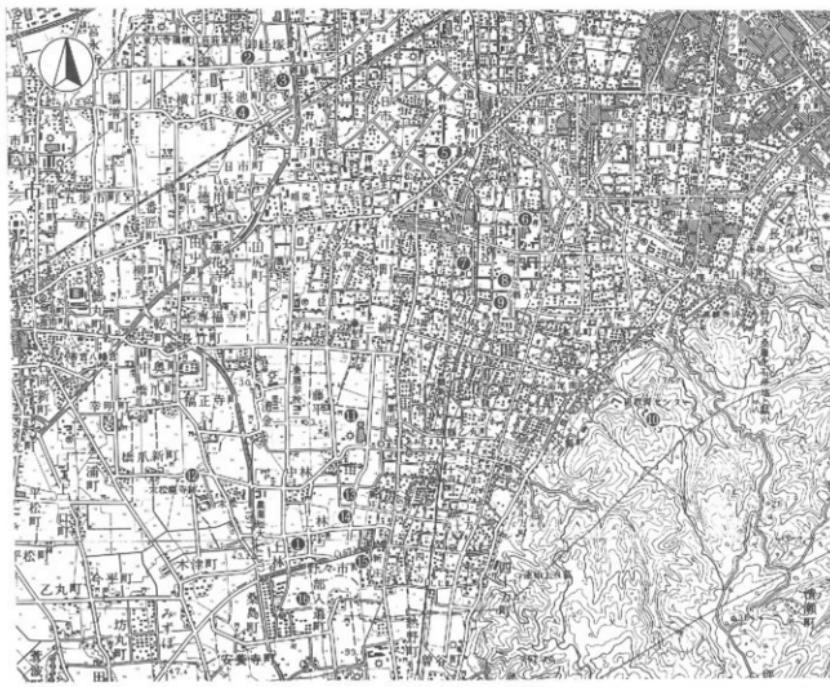
第3章 調査の概要

第1節 分布調査

平成9年3月27日に面積約1,500m²の範囲で調査を行った。トレント5箇所を設定して調査を行った結果、分布調査区南側と東側は自然河川の流路にあたると考えられ、遺構は希薄になることから調査を実施しないと判断した。他の箇所では、ピットや土坑状遺構が発見され、最終的には約450m²を調査することを決定した。

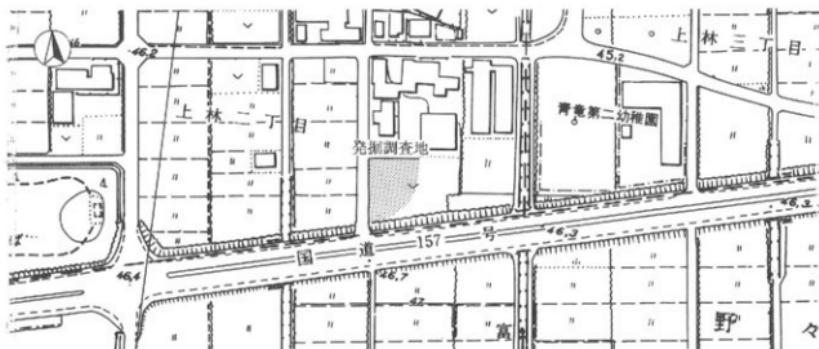
第2節 発掘調査

平成9年4月9日～平成9年5月17日の調査期間を要した。天候にも恵まれ、調査は滞りなく終了した。

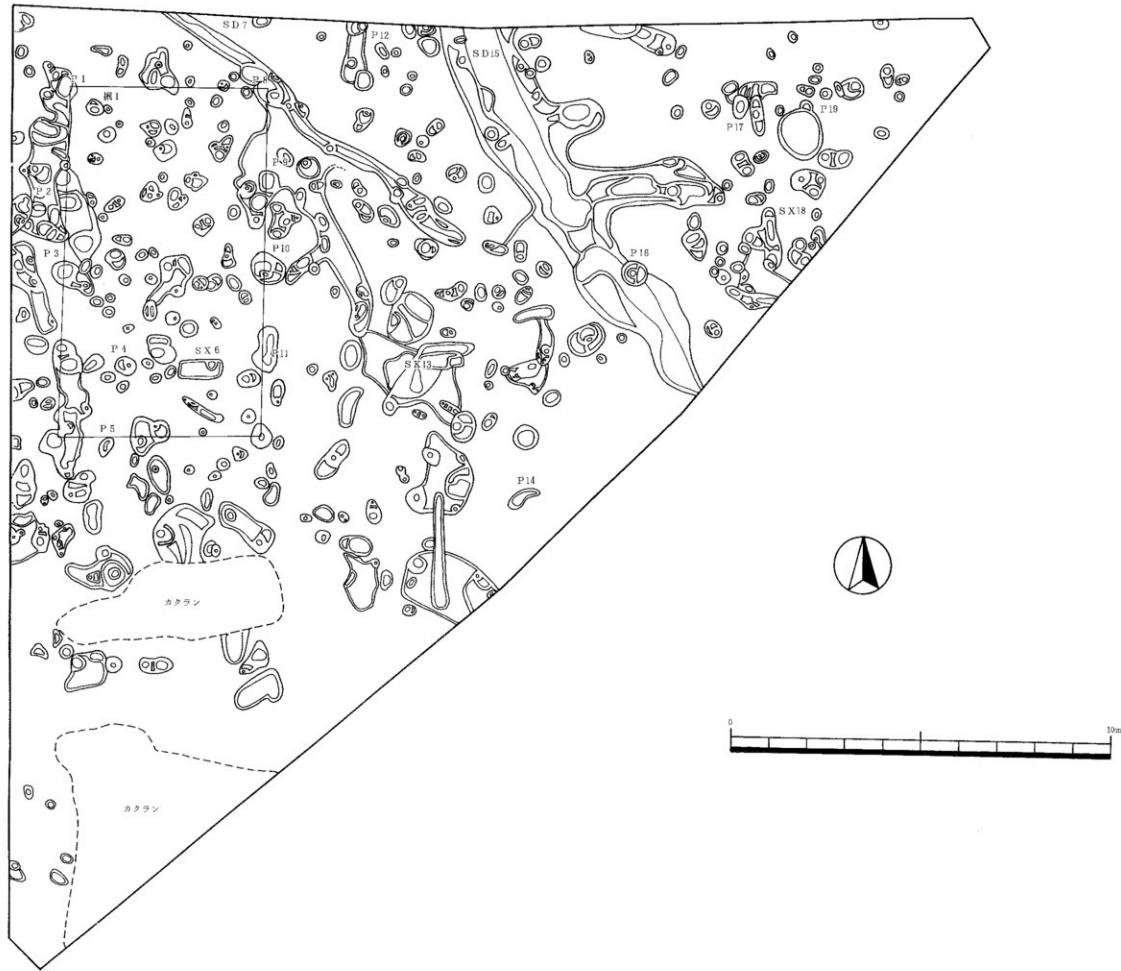


1. 上林遺跡
2. 御経塚シンデン遺跡
3. 御経塚遺跡
4. 長池キタバシ遺跡
5. 押野タチナカ遺跡
6. 高橋セボネ遺跡
7. 富樫館跡
8. 扇が丘ヤグラダ遺跡
9. 扇が丘ハワイゴク遺跡
10. 高尾城跡
11. 栗田遺跡
12. 松木寺跡
13. 下新庄ラヲチ遺跡
14. 上林新庄遺跡
15. 上新庄ニシウラ遺跡
16. 安養寺遺跡

第1図 周辺の遺跡 (1/50,000)



第2図 調査区図 (1/2,500)



第3図 上林遺跡遺構全体図 ($S = 1/100$)

第4章 遺構と遺物

第1節 遺構

掘立柱建物跡は桁行き4間（9.2m）×梁行き2間（5.4m）以上の総柱建物で柱穴の西方延長線上は調査区外のため規模は明らかに出来なかった。しかし、建物跡は大型の部類に入り、一般居住用よりも公共的側面の強い建物と考えられる。床面積は約50m²で柱穴の掘り方の直径は平均約33cm、深さは検出面から約45cm～60cmであった。何れの柱穴も柱痕跡は確認されなかった。また、柱穴掘り方の多くが2つ以上切り合って検出されていることから建て替えを行っているものと考えられる。柱穴であるP9からは土師質土器で煮沸具である長胴甕が一括して5点、また内底の塊が1点出土している。最初に確認された甕は横たわってつぶれた状態で出土した。その土器をとりあげて掘り下げてみると他の土器が統いていた。いずれの土器も口縁部から胴部までは確認されたが、底部は1点も出土しなかった。またP3からはU字型の鉄製品が上層より出土していた。建物跡は真北に向いており、時代は9世紀前半～9世紀中頃で、この時期に行われた行政区画の新しい流れの様相が伺える。

溝は2条確認されており、SD7は幅約40cm～70cm、深さ約18cm～20cmで北西から入って10m程南東に向かって走っている。遺物は遺物番号7、8の他、須恵器の底部や小片ではあるが外面赤彩、内面黒色の土師塊の口縁部等計10点程出土している。SD15はほぼ北から入って南東に向かって抜けている。一番広いところで幅約180cmで深さ約70cm～75cmで、幅は南東に向かうに従って徐々に狭くなっている。この溝は深さ約20cm～30cmのテラスを両側にもっており、途中で1箇所西へ走る溝を検出した。高低差は約5cm南が高く、中央付近で高さ約50cmで若干高くなるものの、全体的に見て差はあまり無い。遺物は打製石斧が1点と弥生土器が数点出土している。

調査区の南側は旧河川の擾乱によって遺構が検出出来ないところもあった。

第2節 遺物

土坑 その他

P1 (1)

外面に波状文の見られる甕形土器で、内面はナデ調整である。

P2 (2)

甕形土器であるが、口縁部のみである。やや小型かと思われる。

P3 (3)

土師器の塊で、内面黒色である。外面はナデで、内面はミガキ調整である。

P4 (4)

須恵器の蓋で、外面に自然釉が若干残っている。

P5 (5)

甕形土器の口縁部で内外面ともナデ調整である。

SX6 (6)

土師器塊の底部で、外面赤彩、内面黒色である。底部裏面には墨書きが見られるが、半削しているため、判読不明。

SD7 (7～8)

7は須恵器の坏である。調整は内外面ともヨコナデである。8は土師塊で、内外面に赤彩が見られる。

P 8 (9)

變形土器の口縁部で、内外面ともナデ調整である。

P 9 (10~15)

10は塊である。内面は黒色でミガキが見られる。P 9では出土したものほとんどが變形土器で、11が(24.8cm)、12(18.3cm)、13(21.4cm)、14(21.7cm)、15(22.4cm)と大型の部類に入るものばかりであった。11・13・15の口縁が内側にそっているのに対し、12・14は口縁をつまんだように外側に反っている。11は外面ナデ、内面ハケのちナデ調整で、12は外面ともナデ、13はナデで、胴部途中からタタキが見られる。頸部下に一部スヌが付着している。14は内面外面ともナデで、口縁部にスヌが付着している。15は外面がハケで胴部途中よりタタキ、内面はハケ後ナデで、同じく胴部途中よりタタキが見られる。口唇部にスヌが付着している。

P 10 (17~20)

17は變形土器の底部で、底径7.2cmで小型の部類に入る。内外面ともナデ調整で底部外面には糸切り痕が見られ、9C中頃のものと思われる。18は塊の口縁部で内外面ともナデ調整である。口径は少片のため明らかではない。19は塊で内面黒色土器でミガキが見られる。20は須恵器の蓋で上部は欠損している。

P 11 (16、21~22)

16は小型の變形土器で、P 10で出土した小型甌の底部と同一個体と思われる。口唇部は内反している。21は蓋形土器で内外面ともヨコナデである。22は双耳瓶の肩部で9C中頃のものと思われる。同一個体と思われる胴部が同遺構から出土しているが、この肩部とは接合出来ない。

P 12 (23)

内面黒色土器の塊で外面はナデ、内面はミガキ調整である。

S K 13 (24)

内面黒色の塊である。摩耗のため調整は不明。

P 14 (25)

弥生時代の變形土器の底部である。底部に厚みがあり、胴部にかけての立ち上がりの角度が大きい。

S D 15 (26、27)

26、27は弥生土器の口縁部である。26は口唇部にキザミが見られる。27もキザミが見られ、指による凹線が口縁下部に2本見られる。1本は口縁と平行に施されており、もう1本は下から口縁に向かって撫で上げるように施されている。胎土中には砂粒を多く含んでいる。

P 16 (28)

須恵器の塊である。調整は内外面ともヨコナデである。

P 17 (29)

須恵器の蓋で、上部は欠損している。

S X 18 (30)

土師器の有台塊で、内面黒色である。外面はナデ調整で、内面は摩耗のため不明。

P 19 (31)

土師器の底部であるが、少片であるため器種は特定できない。底径が5.5cmであるから、小型のものだと思われる。

包含層 (32~44)

32は内面黒色土器の塊で、内面ミガキ調整である。9C後半のものと思われる。33は須恵器の蓋で口径18.8cmと、本調査で出土した中で一番大きい。8C後半のものと思われる。

3.4は有台壺で、口径10.4cm、底径6.9cmと比較的小さく、器高4.0cmと小型である。3.5は菱形土器の口縁部で、口唇部を指でつまんで突起させている。3.6も菱形土器の口縁部で、器壁は比較的厚めである。少片のため口径は明らかでない。3.7は瓶か壺の底部で厚みもあり、しっかりとした高台となっている。外面ともナデ調整である。3.8は菱形土器で内面外面ともナデ調整である。器壁は若干厚めである。3.9も菱形土器で口縁部のみ外面に刷毛状工具による跡が残っている。4.0は菱形土器の口縁部で、摩耗しているため調整は不明である。口唇部は内反しており、大型の部類に入る。4.1は青磁碗で、絵付・文様は見られない。4.2は壺で内外ともにナデ調整が見られる。9C前半のものと思われる。4.3は須恵器の皿で、内面外面ともにナデ調整である。4.4は不明土器で、口縁部に突帯を張り付け、その上を斜め方向から指で押している。弥生時代初頭のものと思われる。

石製品 鉄製品

4.5、4.6は砥石の破損品である。4.7は打製石斧の破損品である。4.8も打製石斧である。4.9はきれいに面取りされていることから何らかの目的で作成されたものだが、用途等は不明である。5.0は鉄製品で、柱穴(P3)より出土している。四方が面取りされており、尖端していたと思われる。用途等は不明である。

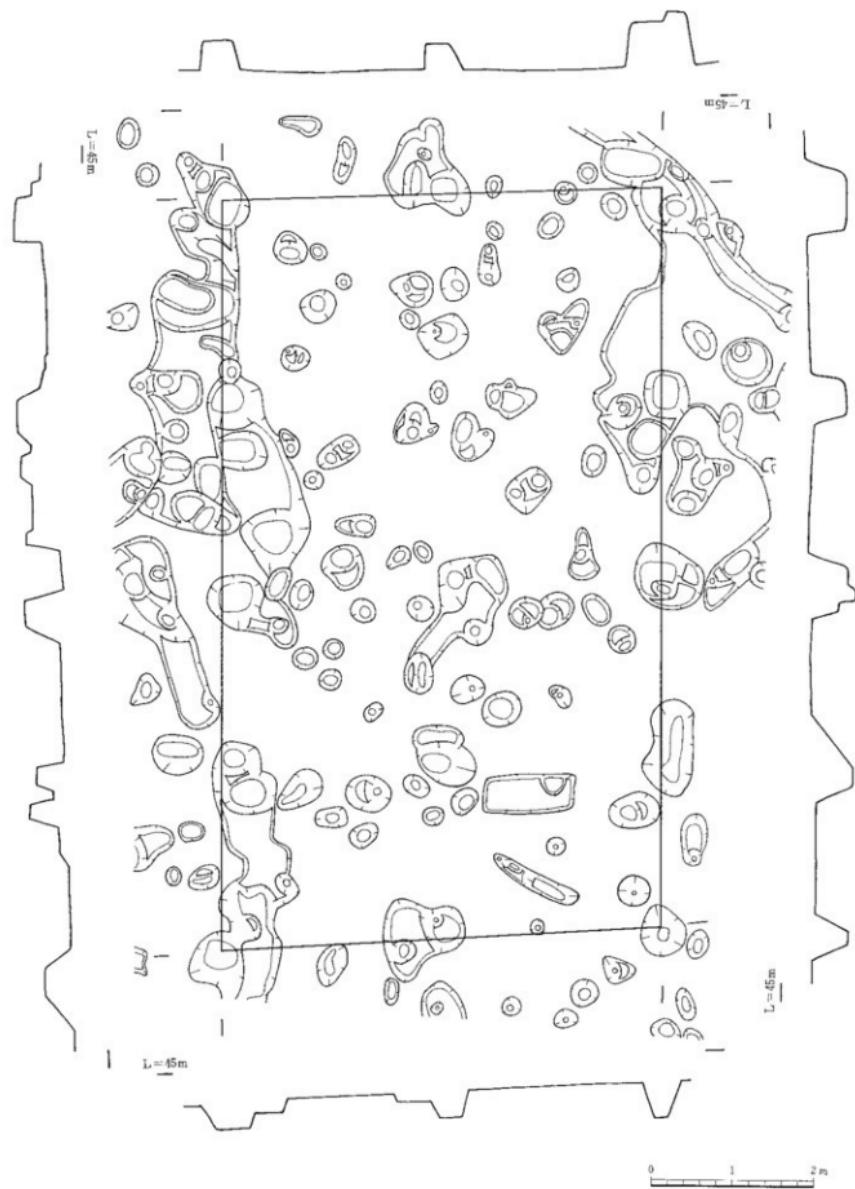
第5章 まとめ

今回の発掘調査の結果、平安時代前期の遺物・遺構の他に、弥生時代初頭や、8世紀後半の遺物が何点か見られた。弥生時代の遺物に関しては、昭和49年度の発掘調査で出土したものと同様の柴山出村式の土器が出土している。ほとんどが溝からの出土であったが、遺物量が極めて少なく、その溝が弥生時代の遺構であると決定づけるまではいかなかった。平安時代の遺構、遺物は一部擾乱が見られたものの、しっかりとした柱穴等が検出されている。同ピットから5個体の菱形土器が出土している。小松市の佐々木ノテウラ遺跡や金沢市の千木ヤシキダ遺跡等でも埋納土坑として建物の柱穴より遺物が出土している例があるが、器種は土師器塊や須恵器壺蓋で、大型の甕の一括出土は見られない。建物造営・廃棄時の何れかに埋納したという考えもあるが、埋納土坑が確認されている土器は食膳具がほとんどで、当遺跡の様に使用痕のある煮炊具で完形品が1体も見られないことから土器廃棄場所という考えが妥当ではないかと思われる。今回掘立柱建物跡の付近で検出された墨書き器や昭和49年度調査で石帶が確認されたことを踏まえると、周辺地域をおさえた有力権力者が当地に存在していたと考えられる。平成9年5月に今回調査区の10m北東に位置する箇所を分布調査した結果遺跡が存することが判明していることから、上林遺跡はまだ北に伸びていくことになると想われる。

以上、今後の調査に期待し、成果を十分にまとめ切れなかった調査担当者の力量不足を提示することで報告を終わりたい。

参考文献

湯尻修平 石川県教育委員会	『安養寺遺跡群（上林地区）調査報告』	1975年
北野博司 石川県立埋蔵文化財センター	『佐々木ノテウラ遺跡』	1986年
出越茂和 金沢市教育委員会	『千木ヤシキダ遺跡』	1987年
前田清彦 松任市教育委員会	『松任市三浦・幸明遺跡』	1996年



第4図 柱立柱建物跡実測図（1/60）

土器観察表

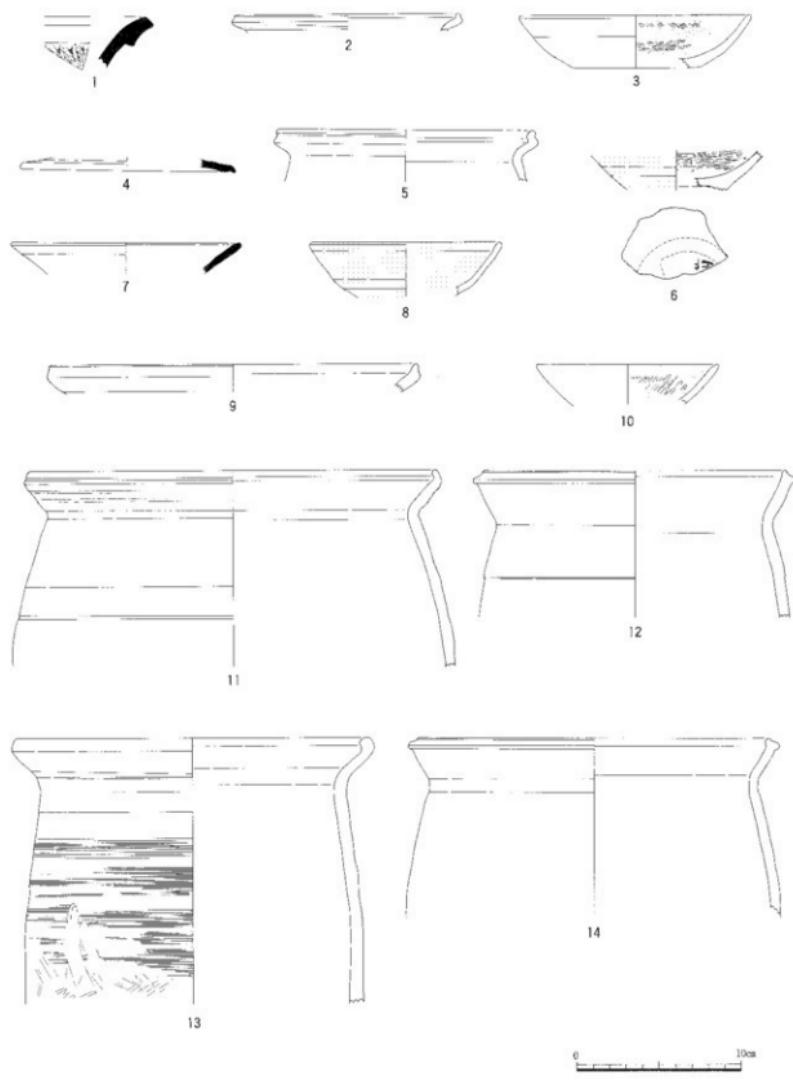
	出土地点	器種	法量 (cm)	焼成	色調外/内	備考
1	P 1	甕		並	暗灰色	外面に波状文が見られる
2	P 2	甕	口径13.7cm	並	暗茶褐色	1~2mmの石英粒が見られる
3	P 3	甕	口径14.2cm	良	黒色~淡黄褐色/黑色	内面黒色。赤色粒含む
4	P 4	蓋	口径13.1cm	並	暗灰色~淡灰色/淡灰色	一部に灰釉残る
5	P 5	甕	口径15.8cm	並	淡黄褐色	
6	S X 6	甕	底径 6.1cm	並	赤彩/黑色	
7	S D 7	皿	口径14.1cm	並	暗灰色~淡灰色/淡灰色	石英粒が見られる
8	S D 7	甕	口径11.8cm	並	赤彩	
9	P 8	甕	口径22.3cm	並	黃橙色	
10	P 9	甕	口径11.1cm	並	黃褐色/黑色	内面黒色
11	P 9	甕	口径24.8cm		淡黄褐色	赤色粒含む
12	P 9	甕	口径18.3cm	良	淡黄褐色~黃褐色/淡黄褐色	
13	P 9	甕	口径21.4cm	並	淡黄褐色~黃褐色	
14	P 9	甕	口径21.7cm	並	黃褐色	外面にスス付着
15	P 9	甕	口径22.4cm	良	暗褐色~深褐色/淡褐色	
16	P 1 1	小型甕	口径13.7cm	並	黒褐色/深褐色~黃褐色	
17	P 1 0	小型甕	底径 7.2cm	良	暗褐色~橙褐色/橙褐色	底面に糸切り痕残る
18	P 1 0	壺		並	淡黄褐色	
19	P 1 0	甕	口径11.2cm	並	黒褐色~淡黄褐色/黑色	内面黒色
20	P 1 0	蓋	口径16.0cm	並	淡青灰色	1~3mmの石英粒が見られる
21	P 1 1	蓋	口径16.2cm	良	灰色	
22	P 1 1	双耳壺		良	淡青灰色	一部に自然釉残る。1~5mmの石英粒が見られる
23	P 1 2	甕	口径13.6cm	並	黒色~淡黄褐色/黑色	内面黒色
24	S K I 3	甕	口径14.0cm	並	黑色/淡黄褐色	内面黒色。雲母が見られる
25	P 1 4	甕	底径 5.9cm	並	暗褐色/淡茶褐色	石英粒が見られる
26	S D 1 5	鉢		並	黃褐色	外面にキザミ。指頭による圧痕が残る。赤色粒含む
27	S D 1 5	鉢		並	暗茶褐色/茶褐色	外面口唇部にキザミ。指頭による圧痕が残る。赤色粒含む
28	P 1 6	甕	口径14.8cm	並	淡灰色	
29	P 1 7	蓋	口径15.1cm	並	淡青灰色	
30	S X 1 8	有台甕	底径 7.2cm	並	淡黄褐色/黑色	内面黒色。雲母が見られる
31	P 1 9	甕	底径 5.5cm	並	黃褐色/淡黄褐色	赤色粒含む
32	包含層	甕		並	黃褐色/黑色	内面黒色
33	包含層	蓋		並	淡灰色	
34	包含層	环	口径10.4cm	並	暗灰色/淡灰色	赤色粒含む
35	包含層	甕	口径18.6cm	並	橙褐色/褐色	
36	包含層	甕		並	橙褐色/褐色	
37	包含層	甕 or 蓋	底径 7.8cm	良	暗青灰色/灰色	
38	包含層	甕	口径11.2cm	並	橙褐色/淡黄褐色	
39	包含層	甕	口径17.0cm	並	淡褐色/淡黄褐色	
40	包含層	甕	口径26.4cm		淡橙褐色	
41	包含層	青磁碗	口径16.2cm			絵付け・文様なし
42	包含層	环	口径14.4cm	並	淡青灰色/暗茶灰色	
43	包含層	皿	口径15.0cm	並	淡青灰色	
44	包含層	不明		やや不良	暗褐色	白色粒含む

石製品観察表

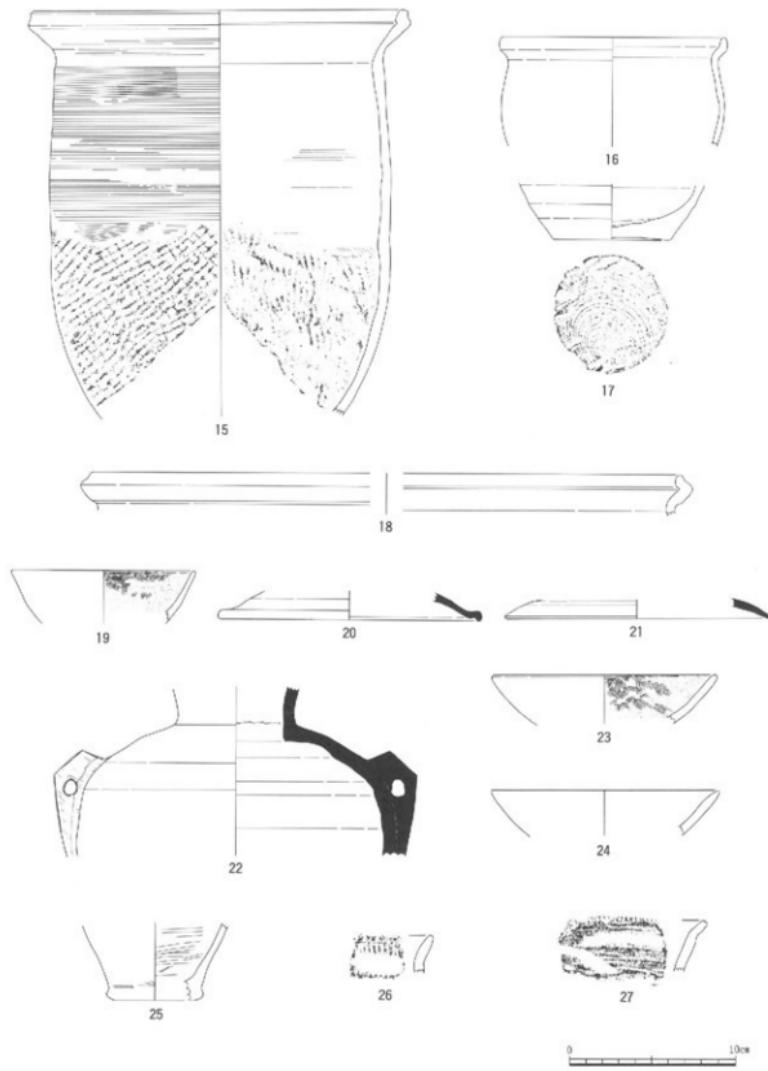
番号	出土地点	種別	形狀	方量 (cm)	重量 (g)	備考
				長	幅	厚
4 5	包含層	砾石	長方形	9.9 3.3 2.5	1 4 0	
4 6	包含層	砾石	長方形	6.5 5.2 2.3	1 0 0	表面に付着物が見られる
4 7	包含層	打撲石斧	長方形	4.1 6.1 0.8	2 7. 2	破損品
4 8	S D 2	打撲石斧	長方形	11.6 10.2 4.5	5 0 0	
4 9	S D 2	不明	長方形	15.5 12.0 3.5	6 1 0	

鐵製品観察表

番号	出土地点	種別	形狀	方量 (cm)	重量 (g)	備考
				長	幅	厚
5	P 1 2	不明	U字型	13.0 5.2 1.0	1 1 0	



第5図 P 1(1)、P 2(2)、P 3(3)、P 4(4)、P 5(5)、SX 6(6)、SD 7(7. 8)、
P 8(9)、P 9(10,11,12,13) 出土土器



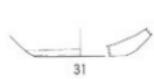
第6図 P 9(15)、P 10(17, 19, 20)、P 11(16, 21, 22)、S K13(24)、
P 14(25)、S D15(26, 27)出土土器



28

29

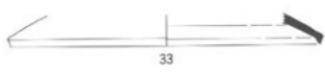
30



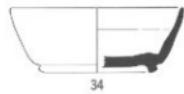
31



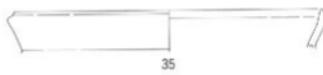
32



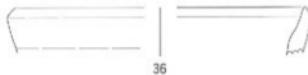
33



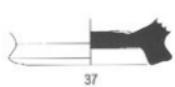
34



35



36



37



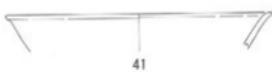
38



39



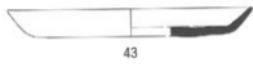
40



41



42



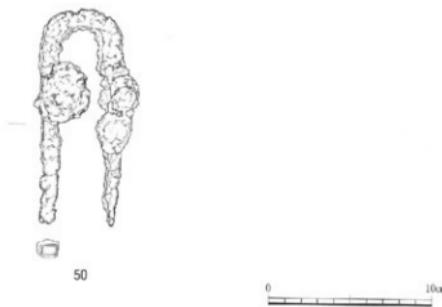
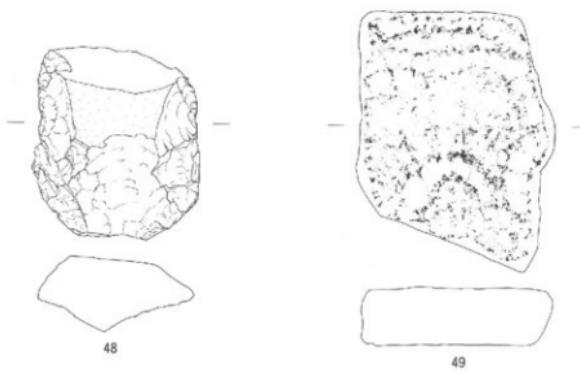
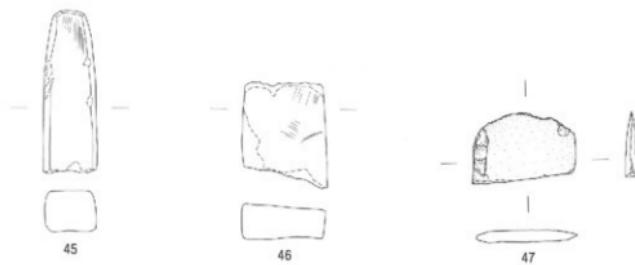
43



44



第7図 P16(28)、P17(29)、SX18(30)、P19(31)、包含層(32~44)出土土器



第8図 包含層(45,46,47)、S D15(48,49)、P 3(50)出土石製品、鉄製品

S D 1 5 完掘



壠立柱建物跡

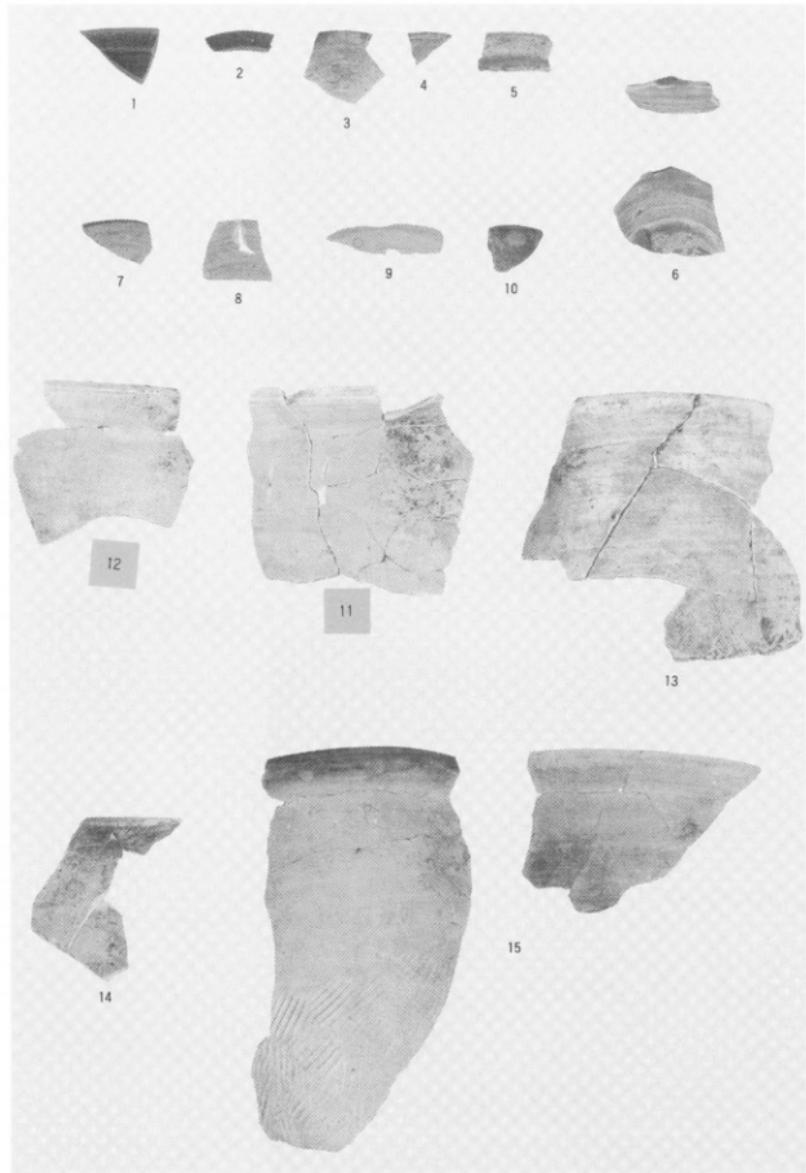


調査区余景



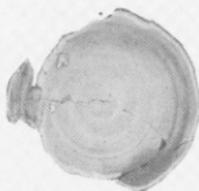
P 9 土器出土状況







16



17



18



19



20



21



22



23



24



25



26



27



28



29



30



31



32



33



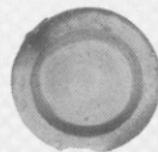
34



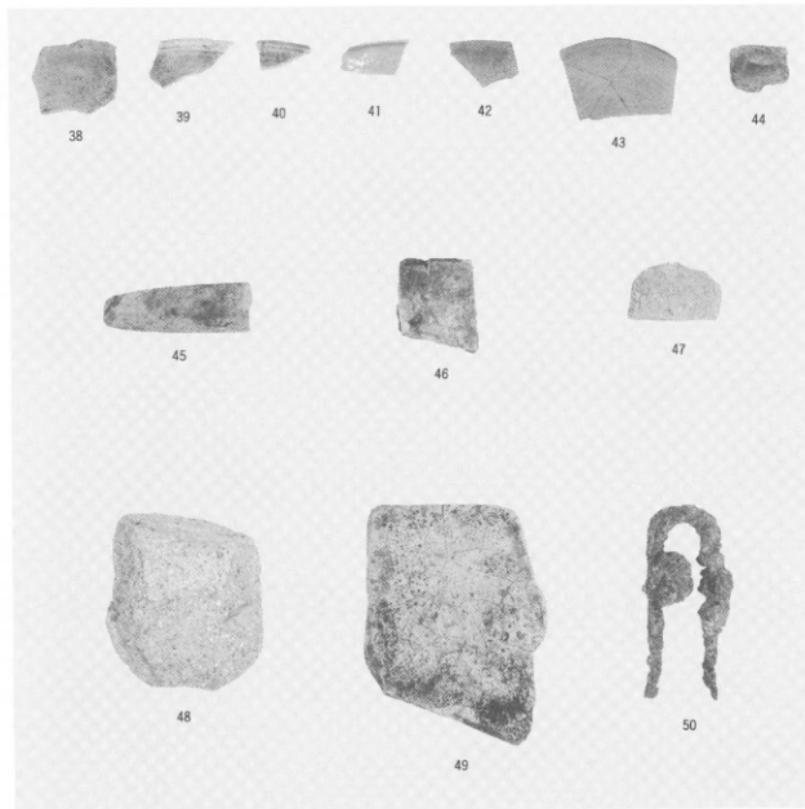
35



36



37



報告書抄録

ふりがな	かんばやしいせき						
書名	上林遺跡						
副書名							
巻次							
シリーズ名							
編著者名	徳野裕子						
編集機関	野々市町教育委員会						
所在地	〒921-8815 都道府県 石川県石川郡野々市町本町5丁目4-1 TEL 076-246-2344						
発行年月日	1998年3月31日						
ふりがな 所収遺跡名	ふりがな 所 在 地	コ 一 ド 市町村	北 緯 遺跡番号	東 経 ...	調査期間 ...	調査面積 m ²	調査原因
かんばやしいせき 上林遺跡	いしかわけんいしかわぐん 石川県石川郡 ののいちまちかんばやし 野々市町上林	17344	16001	36度 30分 52秒	136度 36分 15秒 1997.4.9 1997.5.17	l 450m ²	農産加工場 建設に伴う 緊急発掘調 査
所収遺跡名	種別	主な時代	主な遺構	主な遺物	特記事項		
上林遺跡	集落跡	弥生		弥生土器	弥生・平安時代の 複合遺跡		
		古 代	掘立柱建物跡	土師器、須恵器、 鉄製品	弥生土器は溝から の出土であるが、 遺物量が少ないた め溝が弥生時代の ものとは断定出来 ず。平安時代の総 柱建物を検出。		

上林遺跡

発行 1998年3月

編集発行 野々市町教育委員会

〒921-8815 石川県石川郡野々市町本町5丁目4-1

TEL 076-246-2344

印 刷 北國書籍印刷株式会社

